

マルコ福音書6：1-13、悔い改めの洗礼

今日の洗礼式の集いに感謝することから始めさせて下さい。今日は離れていた時を経て、私たちが教会に復帰した日です。今日の福音書には二つの主題があります。

最初の前半は、イエスが家族と故郷の村について述べています。

今日はこの事については話しませんが、質問があれば後で尋ねて下さい。

今日は洗礼を祝う日であり、イエスが弟子たちを世に送りだされた福音書の後半を、取り上げてみます。

イエスは仕事の内容より旅装リストをより詳しく述べられている。気が付いたでしょうか？

もしあなたが今日、洗礼を授かると述べるなら、弟子であるとは何であるかと思うだろう。

(弟子たちが) サンドルを履くのはよい事であるが、それ以上に知りたくなるだろう。

もしあなたが今日、洗礼の誓願をすると再言及するなら、弟子であるとは何であるのかと、新たに思うだろう。(弟子たちが) どれほどのパンを持って行くのかより知りたいだろう。

弟子たちが弟子として世界に出て行った折、実際に行ったことを知りたくなるであろう。

マルコ伝のこの節で、すべての人々は悔い改めるべきだと弟子たちは布告している。

すべての私たち。悔い改める。

それは今の教会にとって難しい一つである。悔い改める。

私たち教会は、この悔い改めの実践でしばしば大変な、大変な誤りを犯してきた。

そして今日、洗礼誓願に備えて、“悔い改め”とは何かと改めて思い起こさせたい。

この世の原点は、複合体である。第一部は変革する事。第二部は後悔する事である。

これらの複合体の各々を、十分に検証する価値がある。

悔い改めるとは、方向を変えることである。悔い改めの最も基本となるのは意向である。

私たちが神に向き合うなら、命が生まれる。そしてほんの少しの間、おそらくは長い間、神から離れるだろう。生きている私たちは、神から離れる。

それでも神は、常に、再び神に向き合うようにと私たちを招かれる。

悔い改めるとは、神のもとに帰ることである。

立ち止まって想像してみよう。神から離れていると仮定すると、どのような自分自身を想像するのだろうか。「はい、私は神に向き合っています」と言えるまでに、それはどれくらいの重みでなければならないのか。私はここで脱線してしまった。今、私は悔い改めなければならない。大きく考えるための試みをしている。私たちの聖公会が関与した、先住民寄宿学校への悔い改めが必要とされている。大きく捉えることだ。殺人、不貞、窃盗への悔い改める必要さがある。これらの悔い改めが必要とされる時は、必ず悔い改めるのだ。しかし弟子たちは、すべての人々に悔い改めよと訴えた。数人の悪人と施設だけではない。すべての人々に。

悔い改めは、高価な品物とは比べられないほど大切である。イエスに従う者として、私たちは常に活動する霊的实践（実行）に献身するのだ。

磁石をうまく使って森を歩くことの隠喩（メタファー、別のたとえ）を見つけた。私たちは神との人生を踏み出している。それは磁石を使って森、深い森を歩き始めるようなことである。方向を取り、神に向き合う人生を、自分自身に定めるのだ。そして歩き始める。しかし森の中では、真っ直ぐな線を歩くことは不可能である。方向を定め、歩き始める。しかし3歩を踏み出すと、道に木がある。それでコースを少し外れるが、もとの道に戻る。しかし小川、崖、川に突き当たる。常に修正し、自分の方向に戻ってゆく。

従って神に向かって歩む人生には、霊的实践（霊の働き）が伴うのだ。正しい方向に向かって歩み始めるのだが、障害物は実際に存在する。まず最初に、家庭生活の悩みに突き当たる。しかし少しだけ逸れるが元に戻れる。そして仕事に出かけ、職場に行くだろう。それは請求書を支払い、食べるのに必要だからだ。あなたの職場は、あなたをさらに道からそらせる。障害物は実際なのだ。悔い改めへの招きとは、人生を捧げることであり、赦しの実践である。悔い改め、それは私たちを招き、導き、神との人生は喜びであると私たちを気付かせる。神から離れた時（ifではなく）、すべての私たちは、喜びに帰依するために招かれている。

愛に向かおう。寛容と赦しに向かおう。希望に向かおう。古くから実践されている日々の反省と告白は、信仰生活への絶え間ない行動に注意を払う手助けとなるように構想されている。そしてその実践を真剣に受け止める。

悔い改めることは、向きを変えることである。弟子たちが世界の伝道に向かい、すべての人に悔い改めを呼びかけた。今日は私たちが温美姉妹を招いたように、弟子たちはすべて

の人を招いていた。それは神との人生に、いつでも帰依できる働きかけをするためである。

しかしそれは、この言葉（悔い改め）の半分にすぎない。

悔い改めの残りの半分は、後悔である。後悔すること。

神から離れたことは悲しいことであり、そして離別を後悔する。

後悔は複雑であり重要であると、今、分かったのだ。

人間はしばし悲しくなるが、人々はすぐに非難や恥に陥る。

悔い改めは、非難することでも、恥じることでもない。

もう一度言わせてほしい。ただ悲しいのだ。

悔い改めを考えるのは恥ではない。自分自身や他人を非難することでもない。

聖書は本当に、本当に明確である。私たちは他人を裁くべきではない。

非難でもなく、恥でもない。ただ悲しいのだ。

私たちが神から離れる。本当に悲しいのだ。

神に向かうことは喜びである、とあなたがたに気付かせよう。

喜びに背を向けると、私たちは悲しくなる。

神に帰依するために霊の働きに献身すること、神との離別は悲しみであると認識すること、これが悔い改めの使命である。

本日、私たち一人一人は、洗礼誓願を立てる、あるいは新たに誓願を立てみよう。

私たち一人一人は、心と知性と体を尽くし、すべての力を尽くして、神に向かおう。

赦し、隣人愛、正義、平安があふれる世界を待ち望もう。

共に創造物を守り、地上のすべての命を尊重する世界にしよう。

言葉と行いによって、終日に、日毎に、神の王国を宣言する希望を抱くのだ。

そして日々、私たちは悔い改めるのだ。

私たちが命と光に向き合うなら、かつて経験した喜びにいつでも復帰できるのだ。

(文責長澤猛)